
殺意のバックスペース

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺意のバックスペース

【Nコード】

N3925T

【作者名】

takosashi

【あらすじ】

あるマンションの一室での殺人事件。書きかけのメールに、犯人の手がかりが…？ 玉木と井岡の名コンビが、捜査に乗り出します。（わりと軽めですので、どなたでもお読みいただけたと思います）

K市のとある賃貸マンション…

その一室で、川村里美（23）の遺体を、交際相手の男が発見。
110番通報した。

刑事課の、玉木、井岡の二人は、緊急出動要請にて、現場に到着した。

遺体はパソコンの置かれた机の上に、突っ伏した状態で発見された。

後頭部に鈍器で打たれたような跡があり、パソコンを操作している最中に、後ろから殴られたものと見られた。

交際相手、すなわち第一発見者は、高頭功（24）。

「川村さんとの交際は、うまくいっていましたか？」

井岡が、高頭に質問した。

「…それが、その」

高頭は言葉を濁した。

「あまり、芳しくなかった、と？」

「まあ、そうですね」

「最近、ケンカなどしたことはありませんか」

「おい待てよ、俺を疑ってるのかよ」

意外と粗暴な男のように思われた。

「そうは言ってませんよ」

井岡が言つと、ひらき直つたように、

「ああ、疑われてもしょうがねーな。もうこんな女にはウンザリしてたんだ」

「そうですか」

「第一発見者を疑え、つてのが捜査の基本なんだろう？　じゃあ調べてみるよ。俺が来た時には里美は死んでいた。俺は今日こそ別れてやる、つて思つて、話をつけに来たんだよ」

「はいはい、わかりました」

井岡は内心、苦笑いしていた。

玉木の方は、パソコンを調べていた。

（ん？　これはなんだ？）

「井岡、ちよつと来てくれ」

「はい」

井岡がやって来た。

「おれは、こういうのは苦手だ。電子メール、つていつのか？」

「そうですね。メールを書いていたようです」

あなたの声を聞くのも、顔を見るのも好き。だからメールするね。

「…高頭さん」

ふてくされた様子で高頭がパソコンの前にやって来ると、

「見てください。里美さんはこんな文を書いていましたよ」

「…えっ？」

「なにか心当りは？」

「いや、そんなはずは…」

「里美さんは、あなたのことが好きだという意味ですね、これは」

「あの女が、こんなことを書くわけが…」

「それと、この宛先です。あなたのメールアドレスですか？」

高頭は、

「そうです…」

高頭は事情聴取のため、しばらくこの部屋に待機させることになった。

落ち着かない様子だった。

「井岡よ…あの男がやっぱり犯人か？」

「違いますね」

井岡は再び断言した。

「あくまで推理の域を出ませんが、犯人はガイシャと親しい人物で、女性です。そして彼女は、あの粗野な男に、一方的に恋心を寄せています」

「な、なに?! なんて、そんなことがわかる?」

「このメールの文面です。よく読んでください」

あなたの声を聞くのも、顔を見るのも好き。だからメールするね。

「恋人どうしの、ラブレターのやり取りのようだが?」

「声を聞くのも、顔を見るのも好きなら、なぜメールなど送るんです? こうした方が、しつくり来ると思いませんか」

井岡はキーボードをタイプした。

あなたの声を聞くのも、顔を見るのもイヤ。だからメールするね。

「なんと…『好き』を『イヤ』に変えると…」

「里美さんと高頭の関係は冷え切っていた。メールの文は、最初はこうなっていたんです」

「だれが、変えたんだ?」

「知れたこと。犯人です」

「その、あいつに惚れてる女か?」

「そうです…犯人はあの2人に別れて欲しかった。そして一方的な思い込みで、里美さんがいなくなれば、自分と高頭が恋人どうしになれる、と考えます」

「恐ろしい…」

「そして犯行に及び…その後に、この文を見るんです」

あなたの声を聞くのも、顔を見るのもイヤ。だからメールするね。

「すでに2人の仲は破局寸前。犯人は、自分が無用な殺人を犯したことを知ります」

「それで…？」

「愕然として、罪の意識に苛まれ、里美さんはこんなメールを送るような女性ではない、本当は一途に高頭のことを想っていた、と、思わせようと思います」

「それで、『イヤ』を『好き』と…」

「犯人は、おそらく里美さんの親友でしょう。せめてもの償いに…と考えたんでしょうか」

その後…川村里美の親友、福山智子（23）が出頭し、犯行を自供した。

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3925t/>

殺意のバックスペース

2011年10月9日01時23分発行